

『岡山商大論叢』（岡山商科大学）

第47巻第1号 2011年7月

Journal of OKAYAMA SHOKA UNIVERSITY

Vol.47 No. 1 July 2011

《翻 訳》

アンドリュー・ユングステッド著  
『マカオにおけるポルトガル人居留地と  
ローマ・カトリック教宣教の歴史  
—外国人の繕写した濫觴の記—』 第2回

南 部 稔

Sir Andrew Ljungstedt, “A Historical Sketch of the Portuguese Settlements in  
China; and of the Roman Catholic Church and Mission in China” (Part 2)

Minoru Nambu

第2巻 マカオにおける固定居留地

第1章 歴史概況

数年してヨーロッパ人がマカオに定住するようになったが、それはいかなる権利によるかは議論の話題になっている。ポルトガル人が到達した時、中国の海岸にそった無数の島嶼、岩場、入江から勇猛な冒険家の一団が出没していたが、彼らは合法的な商売をするというよりは、穏やかで勤勉な住民からの掠奪に熱をあげていた。彼らをうまくだきこうもうとするならば、頭目やその仲間に対して貴重な儲けを山分けすることを保証しなければならなかったため、商人たちはことさら考えあぐねていた。

貿易を妨害されないようにと、ポルトガル人は中国人にとってもほぼ同様に厄介であったこの輩をできれば襲撃して撲滅しようと決意した。跋扈していた海賊を中国の入海から一掃すると、ポルトガル人は香山県のあるレギュロ (Regulo)、すなわち顔役に争いを仕掛けた。その戦争を引き起こした事への抗議の言及がないだけでなく、戦争行為がいつごろからはじまってどれだけ続いたのか、またその顛末がどうだったのかの詳細さえも知らされていない。激しい抵抗の末、レギュロが制圧されると、その島は征服されて、勝利者たちはそれぞれの取り分を手に入れたといわれているが、盟約あるいは和約といったものがこれまで公表されていないので、ポルトガル人が占領したとされているこの島の最終的な境界を決めることはまずもって不可能であろう。香山県との境界をなす西南向きの岩場が征服されたことくらいは当然ながら理解できた。ポルトガル人はその上に住居を構えてみたところ、対内と対外の貿易をするには思いのほかよく適していた。「媽港という神の名の街」(Cidade do nome de Deos de Macao) (注釈1) と称された町は、この半島でどんどん進歩を遂げていったが、それは否定されているように中国のいずれかの皇帝の恩恵と特許にもよるものではなく、騎士道的なポルトガル軍の成功によるものだったのであった。

(注釈1) 校閲者が考訂したところ、マカオ (Macao) はアマカオ (Amacao) を簡略化したものであり、アマカオは阿媽港あるいは亜媽港、マカオは媽港をそれぞれ音訳したものであった。

以上は五十年前に記されたある大臣の備忘録から写したものである (注釈1)。それは以下の主張と矛盾している。中国人の編年史家は嘉靖三十年 (一五三五年) (注釈2) に一隻の外国船が姿を現すと、一五三七年にさらにもう一隻の外国船が中国の入海の沿岸に姿を現したと書き記している。商人たちは上陸して一時的に避難し、船に載せて被害にあった貨物を乾燥させるために数軒の小屋を建てる許可を要請すると認めてもらえた。こうした便宜が聞き入れられたのは一五二二年であったが、その時、ポルトガル人は上川島 (サンシャン) を追い出されていたとはいえ、和解の

交渉をする時間が決してなかったわけではない。(一五三七～一五五七年の)十八年もしくは二十年の間に中国人とポルトガル人は貿易をするために屯門(タマオ)あるいは浪白澳(ランパカウ)のどちらかで再び会っていたようである(訳注1)。一五五七年には幾つもの集団がマカオに集まるようになったのは、中国官吏が外国人に当時、「阿媽港」(アマンガオ)(Aman-gao)の名称で知られていた「不毛の島」に定住する許可を与えたからである。上記のことをフェルナン・メンデス・ピントが遍歴記や航海記で伝えている。この主張は中国における同胞の最初の功績について記した現代の著者たちのものとは矛盾していない。

(注釈1) Montalto de Jesus, op.cit. pp.二四～二五もこの文章を引用して、備忘録はリスボンに保存されている資料にみられるという。それは一七八四年にポルトガル植民大臣であったマーチンホ・デ・メロ・エ・カストロ(Martinho de Mello e Castro)の手によるものである。H.B.Morse, 'The Chronicles of the East India Company Trading to China, 一六三五～一八三四'(モース『東インド会社の対華貿易編年史、一六三五～一八三四』)、Oxford、一九二六、vol.四、pp.二六四～二六六の記載によると、一八三〇年のゴアのポルトガル統治者はイギリス領インド植民地大総督に書簡を送って、ポルトガルがマカオを確保するようになったのは征服による権利だと強硬に公言しているのをみると、このような言い方は当時のポルトガル人の間で非常な広がりを見せていたことがわかる。

(注釈2) 嘉靖三十年は西暦一五五一年であるから、以下でまたもやポルトガル人が恩恵により上陸して貨物をひっくり返して乾燥させたのは一五二二年だといっているがいずれも誤りである。万暦の郭棐『広東通志』卷六九「澳門」条の記載では、この事が発生した年代を嘉靖三十二年(一五五三年)としており、これが最も信頼できる。(訳注1)ポルトガル人がマカオに入ったのはいつであったのかについては諸説紛々だが、主なものは次の三種になるという(黄啓臣『澳門歴史-从遠~1840-』澳門歴史学会出版、一九九五年、四〇～四三頁)。第一は、嘉靖十四年(一五三五年)である。『熹宗實録』に「至嘉靖十四年，指揮黄瓊納賄，請於上官，許夷僑寓濠鏡澳，歲輸二萬金。從此雕楹飛甍，櫛比相望」とあり、『明史・食貨志』にも同様の趣旨の記載があるが、中山大学歴史系戴裔焯教授はこのようなことはありえないという。第二は、嘉靖三十二年(一五五三年)である。これは広東地方誌、広東地方官吏の上奏文の多くにみられ、比較的信頼がおけるものと黄啓臣教授は判断している。例えば、郭棐が萬暦三十年(一六〇二年)に編集した『広東通志』卷六十九「澳門」条は「嘉靖三十二年，夷舶趨濠鏡者，托言舟觸風濤縫裂，水濕貢物，願借晾曆曬，海道副使汪柏徇賄許之。時僅蓬壘數十間，後工商牟奸利者，始漸運磚瓦木石為屋，若聚落然。自是諸澳俱廢，濠鏡為舶藪矣」という。第三は、嘉靖三十六年(一五五七年)である。これは外国の文献に多くみられ、ピントの『遍歴記』では「翌朝、私たちはサンシャン島を出発し、日暮れにランパカウという六里北方にある別の島に到着した。そのランパカウで当時ポルトガル人はシナ人と交易をしていたのであり、土地の商人の要請によってカンタン(広東—引用者)の役人(マンダリン)が、現在交易の行われているマカオ港をポルトガル人に提供した一五五七年まで、交易は常にそこで行われていたのである」(岡

村有紀子訳、前掲書、二三八頁）と語られている。ユングステッドもこの主張を支持している。以上から、ポルトガル人がマカオに進出したのは一五五三～一五五七年で、一五五三年に上陸して仮住まいを設けて暫定の貿易をすると、一五五七年には煉瓦、木材、石材で住居を構えて定住するようになったものと解釈される。

こうしたことを可能にしたのは、広東の地方官吏が賄賂をとって黙許していたからであり、そのことについて一言ふれておかなければならない。嘉靖年間、皇帝は政務を重んじず奢侈にふけり、他方で道教に傾倒して不老長寿を祈願するようになると、地方の官僚の間で腐敗が進んで賄賂がものをいうようになり、そうした状況にあって汪柏の「密約」が話題になった。一五五二年にポルトガルの日本遠征艦隊司令官ライオネル・デ・ソウザ（Lioner de Souza）が広州に着くと、翌五三年に他国の名義を使って当地の官吏に通商を求め、また暴風雨で濡れた「貢物」を乾燥させるために土地を使わせてくれるようにとの申し入れをした。ソウザは広東海道副使汪柏に賄賂を渡すとその要望が受け入れられて居座るようになったという。『澳門紀略』上巻「官守篇」に「蕃人之入居澳,自汪柏始」とある。この際、ソウザと汪柏の間で口頭による次の「密約」が交わされたともいわれている。①ポルトガル商人は毎年銀一千両を汪柏に賄賂として納める。②汪柏はマカオをポルトガル商船の港とするのを認める。③ポルトガル人は明朝政府に二十パーセントの関税を納めるとする法令を守る。④佛郎機（佛郎機）の名称を葡萄牙（葡都麗加）に改める。⑤ポルトガル人が広州城に入って貿易するのを認める。⑥中国の海道兵船によるポルトガル船への攻撃を停止する。この「密約」でポルトガル商船のマカオ停泊が可能となったが、ポルトガル人がマカオを居留地にすることは認められなかった。だが、いつしか堅牢な家屋のみならず、砲台、城壁、教会が建てられて居留地になっていくが、この年は一五五七年だとされている（陳昕・郭志坤主編『澳門全記録』上海人民出版社、一九九九年、八頁）。

「密約」の真偽のほどはさだかでないが、『明史』卷三二五・外国傳六「佛郎機」には嘉靖「四十四年（一五六五年）偽稱滿刺加入貢,已改稱葡都麗加,守臣以聞,下部議,言必佛郎機假托,乃却之」と記されている（元邦建・袁桂秀編『澳門史略』中流出版社、一九八八年、三二頁）。ところが、ギヤスパール・ダ・クルズ（Gaspar da Cruz）が一八二九年に著した『中国概論』（Tractado da China）のなかでソウザが一五五六年一月にコチンからジョアン三世の兄弟のルイス親王に送った書簡で「和平協定および各種租税の納付は広州城海道副使の命令により決定した」ことが紹介されているし、鄭舜功『日本一鑿』「海市」条でも同様のことが記されているという。汪柏には賄賂だけが重要だったのではなく、ポルトガル人から香物の「龍涎香」（マッコウクジラからとった一種の香料）を手に入れて嘉靖帝に献上するという特殊な事情があったからポルトガル人への配慮は必要だったともいわれている（黄啓臣、前掲書、四四～四五頁）。

イエズス会士たちはこのことを知っていなかったはずがなかろうというのは、一五六二年に数名のイエズス会士がここに来ていたからである。（一五八二年に）インドからやって来たマテオ・リッチ（利瑪竇）（Mathew Ricci）（訳注1）が彼らと共にしばらく過ごして親密になったはずである。学問があり探求心の旺盛な——イエズス会士の——マテオ・リッチにしてみれば外国人が中国との関係においてどのような立場におかれていたのか



について問うのはごく自然であった。もしポルトガル人が征服者としての権利から定住するようになったのであれば、彼が付けていたイタリア語の『日誌』に戦争の原因と和約の条項が記録されていてもおかしくはなからう。その日誌から集めた多くの興味ある情報をニック・トリゴー（金尼閣）は『キリスト教の中国遠征史』に収めているのに、フェルナン・ペレス・デアンドラーデの指揮する船隊が外国の侵略から沿岸を守るよう任務に着いていた中国官吏の心配をよそに去っていったという印象についてしかふれていない。

（訳注1）マテオ・リッチ（利瑪竇）（Mathew Ricci）については本書の後段で詳述されている。

ジョン・デ・バロス（John de Barros）はアジアを見てもいないのに『アジアの三十年』を著したが、その作業はディオゴ・デ・コウト（Diago de Couto）に引き継がれた。これら二人の歴史家はポルトガル人のインドと中国においてやってきた事の次第について語っている。（一六二一年に）南昌府のあるローマ・カトリック教会を主宰していたアルヴァロ・セメド（曾徳昭）（Alvaro Semedo）は自著『中華帝国の対外関係』で、またマヌエル・デ・ファリア・エ・ソウザ（Manoel de Faria e Souza）は自著『ポルトガル領アジア』でポルトガル人はこの島から海賊を排除したためにマカオに居住することが許可されたと主張している（訳注1）。

（訳注1）ポルトガル人が中国に協力して海賊を駆逐した功勞によりマカオを獲得したと最初にいったのはアルヴァレ・デ・セメド（曾徳昭）（Alvare de Semedo）で、そのことを一六四一年刊行の『中国およびその近隣地域での宣教誌』（Relacao da Propagacao de fe na regno da China e Outros adjacentes）に記している。それ以降、これに関わる議論が数多く提起されたが、いずれも次の理由から史実に反しているという（黄啓臣、前掲書、四六～五〇頁）。第一に、これを証明する文献は中国の内外を通じて見られない。第二に、セメド（曾徳昭）の主張は説得力に欠ける。彼が中国にやって来たのは一六一三年で、ポルトガル人がマカオに入ってすでに六十年が過ぎており、しかも南京では禁教により投獄された後、マカオに送還されていたから事情に通じていなかったと考えられる。第三に、「潮州拓林兵乱」と混同しているようである。一五六四年に拓林港を守っていた徐永泰の率いる水兵が広州城に攻め入るというクーデターを起こすと、総兵俞大猷の要請を受けてポルトガル人が手を貸して乱を鎮めたことがある。この時、俞大猷はポルトガル人が「使臣を皇帝に謁見させるために派遣

し、中国でキリスト教を宣教する」ことには同意しなかったが、「功成重賞其夷目」「許免抽分一年」と回答している。第四に、海賊はChang Si Lao（張西老）というが、そういう人物は実在していない。その真偽については後述されている。

ディオゴ・デ・コウトは一五五六年にインドに戻って軍隊で八年間服役すると、リスボンを訪問してからゴアに立ち返っている。フェリペ一世（Philip I）が（一五八一年に）ポルトガル国王を宣言すると、コウトにデ・バロスの『アジア』を引き継ぐよう命じ、彼をインド王室の編年史家にした。謹厳な学者であるディオゴ・デ・コウトは黙して語っていないのを見ると上記の主張が明らかに誤りだということを立証している。デ・ギネス（De Guignes）によれば、自著『北京への旅』で海賊は一五六三年に消滅しているが、それはポルトガル人がマカオを占有してからすでに六年を経過してからの時代のことである。

嘉靖が帝位に即いていた時（別の著者は康熙の治世だというが）、ギネスや他の者たちが張西老（Chang-Si-Lao）と称する強大な勢力をもった海賊が省城広州を包囲していた。張西老は鄭成功（Chin-chin-king）こと国姓爺（Hoxinga）の父の鄭芝龍（Chin-Chi-Ling）（原注1）（注釈1）のChin（鄭）がChang（張）、Chi（芝）がSi（西）、Lung（龍）がLao（老）に転訛して外国語の発音になったのではなかろうか（訳注1）。それなのに、デュハルデ（Duhalde）によるこれらの君主の歴史概説では、どの人物が当時、在位していたのかについての言及がみられない。しかしながら、これら二人の皇帝の一人がポルトガル人の勇敢さと勝利によって広州の包囲が解かれて海賊が壊滅し、首領が殺害されたから、彼らに報奨を与えて実在している島であるマカオを永久に譲渡したということが述べられている。

（原注1）台湾島に盤踞していたオランダ人とスペイン人は、この人物の名前が一官（Ikoan, Equan, Iquon, Equam）であり、また洗礼を受けていたからニコラス（Nicolas）という名前を有していることを知っていた（注釈:鄭芝龍は若いころマカオで洗礼を受けて入信しており、クリスチャン・ネームはニコラス・ジャスパー〈Nicolas Jaspas〉であった）。

（注釈1）戴裔煊教授が一九五七年に『中山大学学報』第三期に発表した「关于澳门

历史上所謂赶走海盜問題」(マカオの歴史におけるいわゆる海賊追放に関する問題)という論文のなかで、ポルトガル人は広東当局が一度、広州を脅威に陥れた潮州の柘林澳クーデターを鎮圧するのに協力しているが、その事件が発生したのは嘉靖四十三年(一五六四年)、すなわちポルトガル人が一五五七年にマカオに入居してから七年目で、クーデター的首謀者は徐永泰、譚允傳、盧君兆であって、張西老もしくは鄭芝龍ではなかったことを考証している。それゆえに、いわゆるポルトガル人が海賊を追放してマカオを報酬として獲得したとする風聞に反駁する。論文でユングステッドの本書の誤りを指摘して、「スウェーデン人のユングステッドは元々、イエズス会士の捏造したポルトガル人が海賊を追放してマカオを報酬として獲得したとする説を信用していなかったが、彼もChang Si-Laoは‘鄭芝龍’の誤写だと推測している。このような推量はもとより誤りであり、この事例から我々は次のようにみている。「ある中国語の姓名の‘張西老’が外国語の音訳を経て中国語に再び転訛されて『鄭芝龍』に変わったのであろう!それが次から次へと伝えられていくうちに、容易に転訛がこのようになったのである」といっている。西洋の中国に関する学術書を翻訳するには十分なる注意を要しよう(訳注:この引用の全文は戴裔焯・鐘国豪『澳門歴史綱要』知識出版社、一九九九年、三四六~三六八頁に掲載されている)。

(訳注1) イタリア人イエズス会士のルドヴィカス・ブグリオ(利類思)(Ludouicus Buglio)は一六六五年に海賊はChang Si Lao(張西老)であったといっているのは、ポルトガル人がマカオに居住するようになったのは中国皇帝の意志によるものだというをいいたかったからであろう。また、フランス人イエズス会士のジーン・バプテステ・ド・ハルデ(Joan Baptiste du Halde)はTchang Si Laoを使って張西老を指している。他方、張西老を藤田豊八は張王連と断定し、ユングステッドは鄭芝龍だと推測しているが、張王連は一五五八年に農民蜂起を起こすと一五六二年に鎮圧されているし、鄭芝龍は明末の人でポルトガル人がマカオ入居を果たしてから百年以上経っているので、いずれも時代が違って関係がないといえる(黄啓臣、前掲書、四六~五〇頁。ちなみに、黄啓臣教授は張王連としているが、藤田豊八によれば張璉となっている(藤田豊八著・池内宏編『東西交通史の研究:南海篇』岡書院、一九三二年、四八三~四八七頁)。

しかし、下賜したことを確証する法律がこれまで公布されていないので、単なる伝承による憶測だけで譲渡としたのでは、トリゴー(金尼閣)に同意にすることにはなっても証明することにはならないであろう。トリゴーは中国人が巨大なポルトガル船をはじめ見て覚えた恐怖を徐々に克服していったから、皇帝に半島というよりは大きな島嶼の一部であるむしろ岩場に外国商人の居住を認めてもらえるよう要請すると、「皇帝はこの提案に同意して、外国人は貢賦あるいは地代、彼らの貨物に対する税金を納付しなければならないと規定した」(訳注1)という見解を中国人と韃靼人(タタール人)(訳注2)のいずれもがとっている。議事亭(セナド・ハウス)に放置されていた数件の官印——公式文書——や、一七四四年にポルトガル領インドを統治していたマルキイス・デ・アロルサ(Marquis de Alorsa)

の命によってゴアでイエズス会士が翻訳した二千件の役所の文書のいずれからもそれに反するものは何一つ検認されていない。それゆえに、我々はラ・クレデ (La Clede) が自著『ポルトガル史』で「ポルトガル人はマカオと呼ばれる不毛の島に移住する許可を要求してそれが認められると、しばらくしてから数軒の家屋を建てる特許が認められた」とする主張に進んで賛同するのである。我々は代理総督として（一七七七年に）議事会に宛てた書簡で「皇帝の意志に従って地代を納めることにより、ポルトガル人はマカオを暫時、利用して利益を得た」と書いているマカオ主教アレキサンダー・ダ・シルヴァ・ペドロサ・ギマラエンス（祁）(Dom Alexander da Silva Pedrosa Guimaraens)（原注1）（注釈1）の意見にも同じく賛同するのである。

（訳注1）本書では「地代」についてほとんど触れられていないので若干説明を加えておく必要がある。ポルトガル人のマカオ定住を黙許するにあたって、当地で実権をもっていた汪柏は毎年、銀五百両を手にしていたが、それは「地代」としてではなく、そうした状態が二十年続いていた。ところが、一五七三年になってポルトガル人が汪柏の後任の海道副使に対して毎年、銀五百両を地代として納める提案をしたところ、これが受理されるとモンタルト・デ・ジーザスという (Montalto de Jesus, op.cit., p.四二)。だが、このことは明代の記録にはないが、清初になってみられるようになり、『澳門紀略』上巻「官守篇」は次のように記している。「其澳地歲租銀五百兩，則自香山縣徵之。考《明史》載濠鏡歲輸課二萬，其輸租五百，不知所緣起，國朝載入《賦役全書》。《全書》故以萬曆刊書為準，然測澳有地租，大約不離乎萬曆中者近是」（印光仁・張汝霖著、趙春晨点校『澳門記略』廣東高等教育出版社、一九八八年、四三～四四頁）。この「二萬兩」は地代とは関係がなかったようだが、シャムなどとの貿易に中国が課した税金だったからポルトガル人とも関わりがあったといえよう。この地代の「五百兩」は国庫金とされて香山県政府が責任をもつようになると、毎年冬至前に一回納付された。広東当局がこうしたことを認めた根本的な理由は明末に社会が不安定になり、辺境も危機的になって、東南沿海の貿易にまで気を配ることができなかったからであろう。以上から、ポルトガル人がマカオの地代を正式に納めるようになったのは一五七三年頃からだと推断されている。

ちなみに、ユングステッドが本書でモースを引用してマカオの地代ははじめ一千両、一六九一年六百両、一七四〇年五百両だったとしているが、そのことは中国の文献に記載がないから、おそらく五百両以外は賄賂ではなかったかと考えられる（林子昇編『十六至十八世紀澳門興中國之關係』澳門基金会出版、一九九八年、四二頁）。

（訳注2）タタール人は東モンゴル高原で遊牧生活をしているモンゴル系の一部族で、タタールを音訳した「韃靼人」も使われている。ヨーロッパ人はモンゴルおよびその支配下のトルコ系諸族を「タタール人」と呼んでいたが、本書では満州族を指して使われている。宣教師フェルベースト（南懐仁）は『東韃靼紀行』で満州を「東韃靼」と呼び、一応蒙古地方とは区別している。しかし、どこにも満州という地名は出てこ



ない。彼は蒙古の地を「西韃靼」、満州の地を「東韃靼」としたのは、清国のなかには満州地方に対する固有の呼び名が存在しなかったことによるという（小峰和夫『満州——起源・植民・覇権』御茶の水書房、一九九一年、一二一～一二二頁）。

矢沢利彦教授は「マルティニの東タルタリアはブーヴェのTartarie Orientale（東韃靼）を指し、いわゆる満州、すなわち今日の東北にあたる地方を指し、Tartarie Occidentale（西韃靼）、すなわち、いわゆる蒙古地方を指す言葉に対する語である」「イエズス会士がただ韃靼と言った場合には満州を指すことが多く」という（ブーヴェ著・後藤末雄訳・矢沢利彦校注『康熙帝伝』（東洋文庫一五五）平凡社、一九七〇年、一二～一三頁）。（原注1）Domは尊称の一種で、ポルトガル語ではDm.と書かれるが、Domはスペイン語のスペルである。

（注釈1）マカオの林家駿司教、前掲書（第一輯）の記載によると、ギマラエス司教は一七七二～一七八九年にマカオ司教に就いている。しかし、一七八〇年にヨーロッパに召喚されて帰朝報告をすると、ポルトガルに留まって戻っていない。その後、ポルトガルで亡くなっている。彼の西洋名はGuimaranesはGuimaraesである。

（中国—訳者）政府は自国の臣民から貿易上の有利な条件が奪われるのを望まなかったし、ましてや彼らが強欲で粗野な来訪者の暴力にさらされることとなればなおさら望まなかったので、（そのことは租借から明らかのように）外国人が帝国に依拠しているということを実感する立場においておくことによって、三度目には臣民を皆殺しにさせたり、財産を破壊させたりしないようにしようとして事を収めたのであった（訳注1）。

（訳注1）広東政府はポルトガル人のマカオ居留には頭を痛めていたようで、激しい議論がみられた。第一は、一五六四年の広東御史龐尚鵬によるポルトガル人をマカオから浪白澳に移して貿易させろという見解である。第二は、総兵俞大猷などによるポルトガル人を武力でマカオから追い出せという見解である。第三は、広東巡撫霍与瑕、両広総督張鳴岡に代表されるポルトガル人にマカオ居留を認めて貿易をさせるという見解である。結局、明朝は第三の見解をとると、一八八七年にいたるまでマカオは中国官吏の主権の及ぶポルトガル居留地・貿易基地という「特殊地域」になっている（黄啓臣、前掲書、一四四～一四九頁）。

私の見解ではマカオの占有は征服によるというよりは帝国の恩恵によるとみたほうが信頼できるとするのは、中国政府が商人、職人と下僕に仕事を止めさせて退却するよう命じ、その後で住民に食糧を供給しないよう規則を公布するだけで、征服者はその土地を放棄せざるをえなくなるからである。最初の居住者の多くが香山の征服した場所に陸揚げした財産を保有していたというのが事実なら、彼らはあまり危険な状態におかれていな

かったということになる。それは生活必需品の供給が行われるかぎり、その産物のおかげで彼らは（ポルトガル人のこと）中国から独立した状態におかれることになるからである。

この土地は誰の手で切り開かれたかは、上述の備忘録では語られていないが、備忘録は中国人がポルトガルの領地を侵犯しはじめても、彼らを強硬に阻止していない所有者の怠慢ぶりをとがめている。侵入者たちはこの豊かな島全体を自ら収容しただけでなく、同じくマカオを隔てる地峡にそって城壁の作図をすると、それが一五七三年にその土地を守り、子供たちを拉致から防ぐ目的で建設されている。この防壁の間には関閘（ポルタ・ド・セルコ）（注釈1）と呼ばれる通用門があるが、外国人がこの境界を通らないよう数人の中国人兵士と一人の役人が守衛にあたっていた。ドミニク・ナヴァレッテ（閔明我）（Dominic Navarette）（原注1）（注釈2）によれば、当初、門は月に二回しか開放されなかったが、その後、隔離された者たちに食糧を販売するために五日に一回開放されるようになり、現在では昼間、開放されているという。

（注釈1）印光任・張汝霖『澳門紀略』卷上「官守篇」は「万曆二年,建管閘於蓮花莖,設官守之」と記している。モリソンが著した‘View of China’（中国概観）p.一三の記載では「万曆二年、関閘が蓮花莖に建設される」となっている。ただし、万曆二年は西暦一五七四年であるので、モリソンは計算を誤って一五七三年としており、本書もおそらくモリソンの書物の誤りを踏襲したのであろう。関閘のポルトガル語の名称であるPorta docercoはporta de cercoの誤りである。

（原注1）『中国概説』（Tratados de la monarchia de China）Madrid、一六七六。

（注釈2）『中国概説』の著者のナヴァレットはドミニコ会士で、順治九年（一六五五年）に中国にやって来て、康熙八年（一六六九年）に去っている。サン・ドミニコ総司教の在任中の一六八九年に逝去している。

## 第2章 地誌

マカオは北緯二十二度十一分三十秒、グリーンニッチの東経十一度三十二分三十秒に位置し、ポルトガル人がそこに定住するようになるはるか以前から安全な港としてよく知られていた岩場からなる半島にある。当時、外国の作家によって「アマカオ」、つまり「阿媽港」（Amangao, port of Ama）と呼ばれていたのは、娘媽角（バー）砲台（Bar Fort）（注釈1）付

近にある阿媽（アマ）（Ama）と称される女神の偶像が奉られている神廟と関係がある（訳注1）。一五八三年にポルトガル人はそれをマカオ（Macao）の語源である「神の名の港」（Porto de nome de Deos）や「阿媽港」（Porto de Amacao）と命名した。その後、マカオは「媽港という神の名の都市」（Cidade do nome de Deos do porto de Macao）とも呼ばれるようになり、現在では「媽港という神聖なる名の都市」（Cidade do santo nome de Deos de Macao）となっている。中国官吏は「阿媽」（ガオウムン）（Gaou-mun）（原注1）（注釈2）の文字で港、「濠鏡」（ガオウキン）（Gaou King）の文字で都市という使い方をしてしていると聞いている。「アウオムン」（Auo-mun）は「ガオウムン」（Gaou-mun）のこの省の発音である（訳注2）。

（注釈1）娘媽角砲台はポルトガル語ではバラ砲台（Forte de Barra）となる。

（訳注1）航海の安全を司る媽祖は福建に起源を有する民間信仰で、マカオ西南端にこの女神を祭る媽閣廟がある。この神は現在でも中国や台湾を中心に広く信仰されているが、日本でも江戸時代には漁民のなかに熱心な信者がいたという。この信仰は古くからあるが、とくに明代に對外貿易が盛んになると海運の安全を祈願することが多くなって媽祖信仰が拡大したという。日本の文献にもマカオが「阿媽港」「天川」の名称で記されている（東光博英『マカオの歴史～南蛮の光と影』大修館書店、一九九八年、十～十二頁）。

（原注一）書籍や文献のなかで、我々はそれがGau-kan、Ghao-kim、Gau-minと称されているのを発見している。

（注釈2）以上の三種類の表音形式はいずれも「濠鏡」の音訳である。

（訳注2）ポルトガル人が来る前、マカオには「濠鏡、鏡海、鏡湖、濠海、海鏡、濠江、蓮洋」のように多くの名がつけられていたが、その後、「濠鏡澳」（濠鏡澳）と呼ばれるようになった。「澳」とは船の停泊する港の意味であり、「濠」はこの近海で多く採れた牡蠣のことで、これを広東語で「濠」というが、「濠」は虫篇であるから雅やかさをもたせるために、その字が「濠」に改められている。また「鏡」は牡蠣の貝殻が平らで滑らかなこととか、半島東西の両側の入海の波が静かで鏡のような水面の情景を表したものだともいわれている。そして、それがいつしか「澳門」の呼称になったが、張汝霖・印光任『澳門紀略』上巻「形勢篇」に記されている「濠鏡澳之名，著於『明史』。其曰澳門，則以澳南有四山離立，海水縱橫貫其中，成十字，曰十字門，故合稱澳門。或曰澳有南台，北台，兩山相對如門雲」（前掲書、一頁）が多くの人々の受け入れるところになっているという（蔣健成・唐穎主編『澳門知多少』珠海出版社、一九九八年、二～三頁）。

他方、「阿媽港」の呼称もあるが、これは六世紀頃に福建出身の船乗りたちが航海の安全を祈願して彼らの民間信仰の媽祖を祀った媽閣廟があることから「阿媽港」とも呼ばれ、これからAman-gauあるいはAma-kanとも称されたが、それがポルトガル語ではAmacau、後にMacauになったという。英語ではMacaoとなる（鄧開頌・黄啓臣編『港史史料匯編（一五五三～一九八六）』広東人民出版社、一九九一年、六～七頁）。

この他に名称がもう一つある。それはポルトガル国王が付けたもので、「比類なく

忠実な、神の御名の都市」(Cidade de Nome de Deus, Nao Ha Outra Mais Leal) といい、これから宣教の使命を強くもった都市であったということがわかる。一五七六年にマカオ司教が「神の御名の都市」としたが、一六四〇年にポルトガルがスペインによる六十年間に及ぶ支配から脱すると、ポルトガル国王ジョアン四世はポルトガル人の名誉を守ったマカオ市民の忠誠心を讃えて上記の名称にしたという(東光博英、前掲書、十二～十三頁)。

この丘陵の多い居留地は広東省の第三級都市である香山県に属するが、地峡の兩岸を横断する城壁によって大きな島である香山と分離されている。一つが南北、もう一つが東西に走る二つの主要な丘陵の山並みが岬を形成し、その基地に河川あるいは投錨地が寄りかかっているように見える。その平地は数軒のヨーロッパ建築様式の住宅以外に、市場(バザール)とかなりの数の商人や職人の中国人の店であふれかえっている。小山の傾斜地、裾野、高台に建っている多様な公共と個人の建築物は旅行者の注意を引く。東望洋山(チャリル)(Charil)(訳注1)と呼ばれる東向きの高い山上には砲台があり、そのなかに東望洋聖母堂(ナ・スラ・ダ・ギア隠修院)(the hermitage of Na.Sra.da Guia)(注釈1)がある。西望洋山(ニラウ)(Nillau)(訳注2)は西向きで、その頂上には西望洋聖母堂(ナ・スラ・ダ・ペーニャ隠修院)(the hermitage of Na.Sra.da Penha)が立っていて、広大な半円形の湾に入り込んでいる。その湾は東に面し、右側には伽思蘭(サン・フランシス)砲台(the Fort St.Francis)、左側には南湾(ナ・サラ・デ・ボムパルト)砲台(the Fort Na.Sra.de Bomparto)がある。上陸すると、目の前には広大で空気の澄み渡った雄大な埠頭である「南湾」(プライア・グランデ)(Praya grande)と多くの瀟洒な住宅があり、そのなかに総督(the Governor)と首席法官(特使)(訳注3)の邸宅がある。

(訳注1) チャリル(Charil)はギア(Guia)とも称され、本書ではいずれもが使われている。

(注釈1) この教会の中国語の訳名は李鵬翥、前掲書、一二四頁による。

(訳注2) ニラウ(Nillau)はペンニャ(Penha)とも称され、本書ではいずれもが使われている。

(訳注3) 首席法官が「特使」と呼ばれるようになった由縁については後段の「マカオの政治体制」のところで説明がある。



都市の東方には水坑尾（カンポ）（Campo）という開豁の地（注釈1）があり、マカオの監獄に隣接してちょうど境界をなしている城壁にまで延びている。「この地域の周囲はかろうじて八マイルといったところである。東北から西南にかけての長さは最大でも三マイル以下で、幅は一マイルに満たない」（原注1）（注釈2）。ポルトガル人はこの半島の長さが一リーグよりはやや長く、中央の幅が一マイルはないとみている。マカオの最初の幾何学様式の略図はスペイン王室フィリピン会社の中国首席代理商マヌエル・デ・アゴテ（Manoel de Agote）とやや若いデ・ギネス（de Guignes）の手によって仕上げられている。読者は『マカートニー卿中国使節記』（訳注1）のために収集されたスケッチとデ・ギネス（De Guignes）の自著『北京の旅』のスケッチのなかにアゴテの地図を目にされるであろう（原注2）（訳注2）。一八〇八年に最高政府の命令によって、ジャクイム・ベント・デ・フォンセイカ（Joaquim Bento de Fonceica）が地図を作成した。半島はほぼ水域で囲まれているため、中国の入海からの潮流と洪水の影響を受けやすい。規則正しい季節風、東望洋山（チャリル）と西望洋山（ニラウ）の麓を突き抜ける爽やかな水流、豊富なストックを有する市場（バザール）という有利な条件があるためにマカオは健康的で快適なところとなっている。とはいえ、時折——とはいってもめったにみられないが——地震が突発的に発生して揺さぶられることがあり、ハリケーンの一種のおどろおどろしい台風が頻繁にやって来る。読者が気候についてもっと正確に知りたければ、補遺Ⅲを参照していただければ幸いである。その記述はJ.R.モリソン（J.R.Morrison）の『一八三四年の英中対照暦』から借用したものである（注釈3）（訳注3）。

（注釈1）水坑尾（カンポ）は大聖堂（サン・ペテロ教会）（Church S.Peter or Se.the Cathedral）と伽思蘭廟（サン・フランシス教会）（Church of S.Francis）の間に位置していて、付近には水坑尾門（サン・ラザラス門もしくはカンポ門）（Gate of S.Lazarus or Campo）がある。本書の補遺十の『澳門市区及港口図』を参照されたい。手書きの亨特（ピント）『旧中国雑記』（広東人民出版社、一九九二年）八四頁の注釈ではそれを大聖堂前の広場としているが、誤りである。

（原注1）G.ストーントン卿（Sir G.Staunton）による『マカートニー卿使節団』（Embassy

of Lord Macartney) のことである。

(注釈2) 以下の文章での書名は ‘Account of the embassy of Lord Macartney to China’ (マカートニー卿中国使節記) となっているが、そのフルネームは ‘An Authentic Account of an Embassy from the King of Great Britain to the Emperor of China’ (中華帝国への大英帝国の国王による使節の実録) である。商務印書館から一九六三年に葉篤義が中国語に訳したものがあるが、その書名は『英使謁見乾隆紀実』である。

(訳注1) この日本語訳には次のものがある。マカートニー著・坂野正高訳注『中国訪問使節日記』(東洋文庫二七七)一九八七年、平凡社。

(原注2) 補遺三を参照されたい。

(訳注2) マカートニーは次のようにいう。「まことに奇妙なことであるが、マカオのヨーロッパ人の中で、われわれに対して最も好意的だったのは、スペイン人の代理商アゴティ氏とフェンテス氏であった。彼らはなにかと小さな親切をしてくれて好意のほどを表明したばかりではない。アゴティ氏は数年間の観察と労苦を費やして現地で自ら作成したマカオの町の平面図と、カントンの河〔珠江〕の水路図の手書きの写本を送ってくれた。彼らが本当にわれわれを信頼していることを、このように実証してみせたのである」(マカートニー・坂野正高訳注、前掲書、七頁)。

(注釈3) ‘Anglo-Chinese Calender for 一八三四’ (一八三四年の英華暦年) のフルネームは ‘Companion to the Anglo-Chinese Calender for 一八三四’ (一八三四年の英華暦年必携) である。

(訳注3) プロテスタントの宣教師であったモリソンは一八〇七年にマカオに到達したが、当時、中国はキリスト教を禁制していたものの、2年足らずで中国語に精通して東印度会社の中国語通訳やイギリス商務館の主席通訳官などを務めた。その後、広東で25年間宣教活動しつつ、聖書の翻訳、『中国語文法』『華英辞典』『中国論』など多くの著作を残している。

## 第3章 区域

### 1 教区 (訳注1)

主要な公共建築物を簡単に記述すれば、昔の住民がマカオを美しく飾り、保護するために財産のみならず、労苦をも惜しまなかったことがわかってもらえるはずである。

(訳注1) 本節にはこのタイトルとなっている教区以外の建築物も含まれている。

#### (1) 公共建築物 (教区の教会)

各区域はそれぞれの教区の教会からその名前を取り入れている。最も重要な教区には聖保禄 (サン・ペテロ) (St.Peter) に捧げられている大聖堂 (注釈1) から大堂区 (バイロ・ダ・セ) (Bairro da Se) の名称がつけられている。この教会はいつ建てられたかはわからない。第二の最も広大な教

区は守護神の聖老楞佐（サン・ローレンス）（St.Lawrence）から風順堂区（バイロ・デ・セント・ローレンソ）（Bairro de St.Lourenco）（注釈2）（訳注1）と称されている。銘文から判断すると、この教会は一六一八年に再建されたようである。第三の最小の教区は花王堂（サン・アントニー教会）（the church of St.Antony）（注釈3）（訳注2）から花王堂区（バイロ・デ・セント・アントニオ）（Bairro de St.Antonio）となっている。それは一八〇九年に焼失したが、ローマ・カトリック教徒とカトリック教以外のキリスト教徒による多額の喜捨によって再建されている。

（注釈1）大聖堂とはマカオ司教座堂のことで、本書における外国語のフルネームはChurch S.PeterもしくはSe.the Cathedralである。

（注釈2）風順堂は風信堂、風信廟もしくは聖老楞佐（サン・ローレンス）堂とも称され、南湾に面している。守護神である聖老楞佐（サン・ローレンス）はポルトガル人の航海を守ってくれる神である。印光任・張汝霖『澳門紀略』卷下「澳蕃篇」は、「西南則有風信廟，蕃舶既出，室人日跂其歸，祈風信於此」という。風信堂もしくは風信廟という名称はこれによりつけられている。

（訳注1）これは一五七五年にイエズス会士が中国の地方官吏の支援を求めて建てたものである。一六一八年、一八四六年に修復されている。

（注釈3）花王堂には花王廟もしくは聖安多尼（サン・アントニー）堂の名がある。『澳門紀略』卷下「澳蕃篇」は「北隅一廟，凡男女相悅，詣神盟誓畢，僧為卜吉完聚，名曰花王廟」という。

（訳注2）これは一六〇八年に建てられたものだが、その前の石に一六三八年と刻まれているのは修復された年代を記しているのであろう。一六〇九年に火災にあい、一六一〇年に再建されている。

## （2）神学院（コレジオ）の教会

### ① 三巴堂（サン・パウロ教会）（the Church of St.Paul）（原注1）（訳注1）。

フランシス・ペレス（Francis Peres）と数人のイエズス会士がマカオを経由して日本に行ったイエズス会のメンバーを投宿させるために使った一軒の家屋を（一五六五年に）保有したことは個人の手稿からわかっている。教会は彼らが中国に足を踏み入れた時と同年代のものだが、その後、偶然に焼け落ちた。一般に聖保禄（サン・パウロ）（St.Paul, St.Paolo）（注釈1）の名称で呼ばれる雄大な建築物は、その建物の西側の角に取り付けられた石碑に刻まれている銘文「偉大な処女聖母に捧げる 一六〇二年」（注釈2）に見られるように、一六〇二年に建てられたものである。

(原注1) この肅然として襟を正させる古びた建物は一八三四年一月二十六日から二十七日かの夜に火災で焼失している。

(訳注1) サン・パウロ教会は三巴寺、大三巴、聖俸禄堂とも称される。ポルトガル人のイエズス会士フランシスカス・ペレス (Franciscus Perez)、エマヌエル・テシェイラ (Emmanuel Teixeira)、アンドレアス・ピント (Andreas Pinto) の三人が一五六二年一月にマカオに到達すると、粗末で簡素な藁葺きの小さな教会を建て、それを天主之母堂 (Igreja de Mdre de Deus) と名づけると、一五七二年から一五七六年にかけて修復されている。一五八二年になって現在の場所に移されたが、一五九五年と一六〇一年の二度、焼失にあっている。一六〇一年頃には日本の禁教が厳しくなると多くの日本人がマカオに難を逃れると、一六〇二年に定礎され、一六三七年に前門の石壁、一六四〇年に教会前の石段が増設された。建設にあたり日本人の喜捨と石工の手によるところ大であったという。礎石に一六〇二年が刻まれている。だが、一八三五年一月二十六日夕刻の焼失により正面の大理石の壁面と石段しか残っていない。そのなかには聖保禄学院が置かれ、三巴静院とも称されていた。

(注釈1) サン・パウロ (聖保禄または聖保羅) はイエズス会十二使徒の一人で、宣教のために三度、遠征している。教会はサン・パウロと命名されたのには、イエズス会士が極東に宣教に行きサン・パウロの事業を継承してくれるという思いが託されている。

(注釈2) 原文は “Virgini Magnae Matri, Civitas Macaensis Lubens, Posuit An. 一六六二” である。本書の一九九二年版で一六六二年としているのは一六〇二年の誤りである。

この古い教会は聖母、すなわちノッサ・セニョーラ・ダ・マドレ・デ・デウス (nossa Senhora da Madre de Deos) 聖母に捧げられたものであり、現在のものもそうである。全体は花崗岩からできていて正面が実に美しい。天才芸術家は敬虔なる物体によってギリシャ様式の建築に生氣を与えるよう工夫を凝らしている。イオニア様式の十本の柱の間には教会堂に通じる三つの門があり、続いて五つの壁龕 (訳注1) をそれぞれ設けた十本のコリント様式の柱が並んでいる。正門上方の真ん中にある壁龕には、人類の愛国心を象徴する地球を足で踏みつけている女性の塑像がみられ、下方に「聖母 (マター・デイ; Mater Dei)」が読み取れる。この天国の女神の両側の人目を引く場所に四人のイエズス会聖者の塑像がある (注釈1)。その上部には聖保禄 (サン・パウロ) が描かれており、聖霊の象徴である鳩もある。この建物のなかには十五分および一時間ごとに鐘を打つ置時計 (訳注2) がある。主要な歯車に刻まれている文字から判断すると、ルイ十四世 (Louis XIV) がイエズス会神学院 (コレジオ) に寄贈したものである。

(訳注1) キリスト教会堂の内壁の一部の窪んだ彫刻などを置く部分で、ニッチと呼



ばれる。

(注釈1) イエズス会の四聖者の塑像とはイグナシオ・デ・ロヨラ (Ignacio de Loyola)、フランシスコ・デ・ボルジア (Francis de Borgia)、アロイシウス・デ・ゴンザガ (Aloysius de Gonzaga)、フランシスコ・ザビエルのもを指す。

(訳注2) これは12世紀末ごろに日時計、砂時計に替わってヨーロッパで発明された歯車仕掛けで自動的に鐘が鳴って時刻を知らせる「自鳴鐘」を指していると思われる。

## ② 聖若瑟 (サン・ジョゼ) 教会 (St.Joseph: “St.Jose”) (訳注1)。

この教会と神学院 (コレジオ) の計画はイエズス会士の手によるものである。礎石が敷かれてかなりの年月になるが、イエズス会士は一七五八年まで聖若瑟 (サン・ジョゼ) 教会でミサを聞く喜びをもつことがなかった。教会はかなり小さいが、調和のとれた権衡 (けんこう) を保っている。丸天井と前面の貫木の掛かっている窓から光が十分に入ってくる。その建造物の外部の両角には二つの塔があり、一つに鐘、もう一つのやや低いところに置時計がある。

(訳注1) 聖若瑟 (サン・ジョゼ) 堂は小三巴あるいは三巴仔とも称され、一七四六年に建設の計画が立てられると、一七四八年に建築に取り掛かって一七五八年に完成をみた。一九〇三年に増築されて今日にいたっている。聖若瑟修院 (サン・ジョゼ・セミナリオ) (Seminario de San Jose) は一七二八年にイエズス会のために建築されている。これは三巴仔修道院とも称される三巴堂の外に設けられた神学院である。

## (3) 女子修道院

### ① 聖方濟会会 (サン・フランシスコ) 修道院 (Convent of St.Francis) (訳注1)。

フランシスコ会士、オースチン会士、ドミニコ会士によってマカオではガンガネリ (Ganganelli) が増援部隊と称した正規の宣教師が構成されている。聖方濟各会 (サン・フランシスコ) 修道院 (the convent of St.Francis)、すなわち「アッシジのサン・フランシスコ会修道院」(convento de St.Francis de Assij) (訳注2) はスペイン人修道士が建設したものがどうかはさほど重要なことではない。このコミュニティのポルトガル人が一五八四年にフェリペ一世の命によりそれを占拠したということはまちがいのないところである。二十人のフランシスコ会士がそこに宿泊することになっていたのに、一八三四年初めにはゴア駐在の会省が任命した修道院

長の監視下に置かれていた二人の会士しかいなかった。この修道院からの眺望は廣大無辺である。「天使の女神」——「天上の聖なる母」(ノッサ・セニョラ・ドス・アンジョス) (nossa Senhora dos Anjos) (注釈1) ——に捧げられている教会はゆったりとしていて、その大きな祭壇は莊嚴である。この修道院の回廊の一つにデ・ラ・ペロウセ伯爵 (Count de La Perouse) の製図工だったダッチェ・デ・ヴェネイ (M.Duche de Veney) が一七八七年に手の入っていない白壁に彼の修道会との関係を象徴するサン・フランシスコ (St.Francis) (注釈2) の像を画いた。それは名作とみなされていた。中国人の画法ではその褪色を止められないだろうが、破損のほうが進んでいる。

(訳注1) 一五七九年にフランシスコ会士ペトラス・デ・アルファロ (Petrus de Alfaro)、アウグスチヌス・デ・トルデシラス (Augustinus de Tordesillas)、ジュアン・バプテスタ・ルカレリイ・ペサロ (Juan Baptista Lucarelli de Pesaro)、セバスチャン・デ・バアエザ (Sebastian de Baeza)、マルチナス・イグナチウス・デ・ロヨラ (Martinus Ignatius de Loyola) などがマニラからマカオにやって来て中国で宣教しようとしたが、広州からマカオに追い返されて逗留している際に修道院と教会を建てて、聖方濟各 (サン・フランシスコ) 堂 (Igreja de Francisco) と名づけたが、マカオの人たちは伽斯蘭廟 (サン・フランシスコ教会) と呼んだ。修道院と教会は一五八〇年に建てられたが、くしくもスペインとポルトガルとの合併が決裂すると、マカオのスペイン人宣教師が排斥されて、ゴア総統はマカオとフィリピンとの関係を断絶する命令を下した。スペイン人フランシスコ会士は一五八四年三月にマカオを離れたが、まもなくして両国関係が好転したため一五八七年にマカオに戻っている。

(訳注2) アッシジはイタリア中部の都市であるが、フランチェスコ教団を創設したサン・フランチェスコ (Francesco d'Assisi) (一一八一～一二二六年) の生誕の地として知られている。彼の墓の上に建てられたサン・フランチェスコ教会、彼の生涯を描いたジョットの壁画で知られている。

(注釈1) 林家駿司教、前掲書 (第一輯) では、天神母后小堂は聖方濟各 (サン・フランシスコ) 会修道院または伽思蘭教堂となっている。中国の文献では伽思蘭寺もしくは伽思蘭廟と称されている。

(注釈2) FrancisはFrancesco d'Assisiのことで、法蘭西斯の訳があり、1181～1226年のイタリアのアッシジの人で、フランシスコの創始者である。

② 聖奧斯定会 (サン・オーガスチン) 修道院 (convento de St.Agosinho) (訳注1) (注釈1)。

聖奧斯定会 (サン・オーガスチン) 修道院からの景色には心が惹かれる。スペイン人が恩寵聖母 (ノッサ・セニョーラ・ド・グラサ) (nossa Senhora do graca) に捧げるために建てたものだというが、彼らがマニラへ

の撤退を命じられると、ポルトガル人修道士が(一五八九年に)引き継いだ。ゴア会省が任命した院長がこの修道院の世話をし、もう一人のオーガスチン会士が任命されて西望洋山(ペンニャ) 隠修院 (the hermitage of Penha) の世話をしている。この教会は一八一四年に修復された。

(訳注1) 一五八四年にオーガスチン会士フランシスカス・マンリク (Franciscus Manrique) などが会長の命を受けてマニラからマカオに赴任して総部を設立する準備にとりかかると、一五八六年になってようやくマカオにやって来て一五八九年にこれを創設した。一六二二年にオーガスチン会士の多くがマカオ東南の西望洋山頂に会所を建てて修道院と教会を付設してその名をエルミダ・ダ・ペンニャ (Aermida da Penha) とした。一七五〇年に『香山県志』はこれを西望洋寺と称し、一八三七年に増築されている(林子昇編、前掲書、一一三頁)。

(注釈1) ポルトガル語ではCovento de St.Agostinhoであるが、マカオの人たちは龍松寺、龍松廟と称した。

修道院長アントニー・アルセディアーノ (Antony Arcediano) が二人の別のスペイン人と連れ立って一五八三年か一五九九年のいずれかに——歴史家の記述ではこのようになっている——マカオ船の乗客としてアカプルコからやって来た。彼らは一軒の家を手に入れると、それを聖多明我会(サン・ドミニコ) 修道院 (convento de St.Dominicans) に転用した。その二年後、彼らはゴアからマカオを退去するよう命じられると、ドミニコ会士は同胞を呼び寄せ彼ら自身をマカオの主人にしようとしたようだが、国王はその修道院をポルトガル人ドミニコ会士に引き渡すよう命じた。スペイン人はゴアに行くと、そこでサン・トーマス・コレジオ (the College of St.Thomas) を創設した。教会はドミニコ会士によって「聖母玫瑰(サン・ロザリオ) 堂」(カサ・デ・ノッサ・セニョーラ・ド・ロザリオ) (Casa de nossa Senhora do Rosario) (訳注1) (注釈1) と命名され、一八二八年に修復された。ドミニコ会士は説教修道士と称されている。一八三四年には彼らは全部で代理司教一人、副司教一人、修道士二人の合計四人であった。三つの修道院は簡素である。

(訳注1) 一五八七年にスペイン人ドミニコ会士がメキシコからマニラにやって来る途中、風に遭遇してマカオに漂着すると、同年七月に聖母玫瑰母会院 (Santa Maria de Rosario) を建てて中国宣教の総部とし、同時に木板で狭い教会を建てたことから「板樟堂」とも称された。その建築はスペイン様式で、再三にわたって修復されている。

(注釈1) 聖母玫瑰(サン・ロザリオ)堂は聖多明我(サン・ドミンゴ)堂(St. Domingo)とも称されたが、中国の文献では板樟堂あるいは板樟廟と称されている。印光任・張汝霖『澳門紀略』卷下「澳蕃篇」に「有板樟廟，相傳廟固庫隘，貧蕃析板樟為之，今壯麗特甚」とある。

### ③ 女子修道院。

我々はこれから女子修道院の聖嘉辣(サン・クラレ)堂(mosteiro de St. Clara)(訳注1)について述べていくことにする。ジェロンイマ・デ・アセンカオ(Jeronyma de Ascencao)という名のトレドの修道女は異教徒の国で自分の職業とする団体を創って、多くの人々の魂を果てしない地獄から救おうと考え、自分が身を粉にして働く場所として中華帝国を選んだ。この崇高なるマザーはトレドを離れると、(一六二一年に)数名の娘たちと共にマニラに到達した。彼女の考えの実現に全身全霊を捧げるため、自分の会省を通じてポルトガル領インド総督リナレス伯爵(Count de Linares)ミゲル・デ・ノロンニャ(Don Miguel de Noronha)にマカオへ行って、そこで聖嘉辣(サン・クラレ)修道院を創設するのを認めてくれるよう誓願した。ついに特許が与えられると、六人の修道女は女子修道院長レオノーラ・デ・セント・フランシス(Leonora de St. Francis)に伴われて一六三三年十一月にマカオにやって来た(アセンカオはすでにこの世を去っていた)。彼女らは東望洋(ギア)隠修院(the hermitage of Guia)に四日間投宿してから、聖方濟各(サン・フランシスコ)修道院(the convent of St. Francis)の責任者の家に連れて行かれた。すると、この者の娘は十一人の他の少女と共に一年と一日で満期を終える見習い修道女になることが許された。その一方で、信徒たちの自発的な労働奉仕と喜捨によって建造された聖嘉辣(サン・クレア)修道院の建築を繰り上げて完成させると、一六三四年四月三十日に修道会がそれを所有した。その教会は「無原罪聖母」(コンセプション・ダ・ヴァーゲム・マイ・デ・ドエス)(Conceicao da Virgem mai de Does)に捧げられている(注釈1)。

(訳注一) フランシスコ会修道女が建てたものである。最初、アセンカオが一六二一年にマニラにやって来てマカオ行きを希望するがまもなくしてマニラで亡くなった



ため、一六三三年十一月にフランシスがフランシスコ会修道女六人を率いてマニラからマカオにやって来て東望洋山（ギア）にはじめて居を構えた。修道院と教会は一六三四年に建設されると、建築費をマカオ市民が寄付した。一八二四年に焼失したが、大きな石段はいまなお残っている。

（注釈1）それゆえに、この修道会は「無原罪聖母堂」とも称されている。中国の文献では尼寺あるいは尼姑廟となっている。印光任・張汝霖『澳門紀略』卷下「澳蕃篇」には「尼寺在澳東北，扁鑰巖嵒，女十歳以下許入寺，既入終其身不復出，雖至親不能入視」とある。

ブラガンサ家がポルトガルの王位に即くと（訳注1）、女子修道院長レオノーラは三人の修道女を連れて一六四三年にマニラに戻った。別の女子修道院長が女子修道会のメンバーによって選ばれたのは、彼女たちは自分たちで誓約しあって修道会に入った者のうちからしかるべき人物をその地位に選任する権限をもっていたからである。この選挙は三年に一回行なわれると、ゴアのフランシスコ会省がこれを承認した。その高級宣教師は二、三年ごとに修道女に対する善悪の観念の指導者（修道女の懺悔を聞く顧問牧師—訳者）とこの修道院の世俗的な事柄の統轄にあたる司教代理を任命する。彼女らは誓約して入会した修道女各人からの千五百ドルの分担金の収入によって支援を得ているが、聖歌隊に仕える者はその金額の半分を修道院に差し出さねばならない。そのほかに輸入貨物の一定量の品物に対して一パーセントが固定関税に付加されると、その半分がこの修道院の口座に入れられるが、その収入は奇妙な変動をしていて、年四百両といったように低いこともあれば、年三千二百両と高くなることもあった。一八三三年には三千八百両にのぼっていた。

（訳注1）一六四〇年、ポルトガルがスペインから再び独立するに際して、ブラガンサ公ジョアンは国王に推戴され、ジョアン四世としてブラガンサ王朝を開いた。

こうした支援があったから、（一六九三年に）議事会とその六人の助手はマカオ自治政権のメンバーである紳士のうちの娘を一人、五年ごとに指名する権限をもち、女子修道院長の同意があればその娘は分担金を払わなくても入会が認めることで合意が得られていた。修道女の人数はさまざま

だったが、最終的に四十人に固定されると、一八三四年初めには三十七人であった。この修道院は一八二五年の大火で消失したが、一八三四年のいまでは再建されている。

#### (4) 隠修院

主要な宗教機構は上述したとおりであるが、隠修院 (hermitages) についても若干の説明をしておかないと十分とはいえないであろう。最古のものは「望徳聖母堂」(ノッサ・セニョーラ・デ・エスペランサ) (nossa Senhora de esperanca)」(注釈1)(訳注1)の隠修院である。言い伝えでは、それはマカオにおいて最初にキリスト教徒の住民たちが礼拝に集まる場所に使っていたものだという。

(注釈1) 林家駿司教、前掲書(第一輯)は望徳聖母堂が一五六九年に創建されると、仁慈堂とも称されていたという。中国人の通称は支糧廟である。

(訳注1) 一五六九年にマカオ司教メルショワール・カルネイロ (Melchoir Carneiro) が仁慈堂 (Santa Casa de Misericordia)、拉法 (ラファエル) 医院 (Hospital de S.Rafael)、麻風院 (Hospital de Lazaro) を建てると、麻風堂の付近に教会を建てたが、それが望徳聖母堂である。だが、教会の前の石版には一六三七年建立とあるが、これは再建された年であろう。その後も一五七七年、一八八三～一八八六年に再建されている。

オランダ人がマカオを侵犯した時、東望洋山 (チャリル) と称される丘陵の上には聖母マリアに捧げられた礼拝堂が立っていたが、それはおそらく現在、聖母雪地殿堂 (エルミダ・ダ・ノッサ・セニョーラ・ダ・ギア、すなわちネヴェス) (ermida da nossa Senhora da Guia—or Neves) に転用されているものであろう。一八三三年(注釈1)にマニラからやって来たフランシスコ会修道女たちはこの隠修院で四日間過ごしている。一八〇八年にイギリス兵が砲台を制圧した時もそれを占拠していた。

(注釈1) 一六三三年の誤りである。

西望洋山 (ニラウ) と称される西側の丘陵にオースチン会修道士が(一六二二年に)西望洋聖母堂 (エルミダ・ダ・ノッサ・セニョーラ・ダ・ペンニャ・デ・フランサ) (ermida da nossa Senhora da Penha de Franca) に着工すると、信徒らは一六二四年にそれを拡張した。ポルトガル船が港に

入ると数発の礼砲でもって隠修院に敬意を表する習わしになっている。隠修院の収入は個人の惜しみない喜捨、それに船乗り稼業で生計を立てている者たちが時折、災難にあった際に聖母マリアが自分たちの生命と財産を守るために授けてくださった恩情への思いから感謝を込めて行われる寄進を頼りとしている。

#### (5) 議事局 (セナド・ハウス:カーサ・ダ・カメラ)

政府が会議を召集する公共建築物は「議事局」(セナド・ハウス:カーサ・ダ・カメラ) (casa da Camera) と命名されている。その高さは二階建てで基礎は花崗岩、他は壁柱を含めてモルタルと煉瓦からなっている。それらの上には「中国の皇帝からの土地の正式な譲与を意味する中国文字」のようなものは何一つ見当たらない。エンタプラチュア (柱頭の上ののっている水平部分) は柱で支えられており、コルニス (軒蛇腹) は緑の色付けをした花瓶で飾られている。この雄大な建築物は一七八四年に建てられ、その費用は総額八万両にのぼっている (原注1) (注釈1) (訳注1)。それには「無原罪聖母小堂」(ノッサ・セニョーラ・ダ・コンセイカオ) (nossa Senhora da Conceicao) があって、議事会のメンバーは仕事に着く前にこのなかでミサを聞く。門の上部にはポルトガルの紋章が画かれており、その下には次のような立派な銘文が書かれている。

「神の名の都市、これにまさる忠誠はない」(注釈2)。

「国王ジョアン四世 (Joao IV) の命により、この都市の総督ジョアン・デ・ソウザ・ペレイラ (Joao de Souza Pereira) が銘文をここに安置し、これにより無窮の忠誠を示す。一六五四年に建立する」(Em nome del Rei Nosso Senhor Dm.JOAOIV.mandouo Governadore Capitaogeral da Praca,Joao de Souza Pereira por este leteiro,em fe da muita lealdade,que conheceo nos meradores della em 1654)。

(原注1) 純銀一両の価値は標準純銀六シリングよりはやや高い。

(注釈2) 議事局は最初、議事亭と称され、明代に建設されたのが始りである。康熙

十二年（一六七三年）刊行の申良翰『香山県志』巻十「外志・澳彝」条は「澳門旧有提調、備倭、巡緝行署三所，今惟議事亭。凡文武官下澳，卒坐議事亭上，彝日列座進茶畢，有欲言則通事番（翻）譯」という。清初の著名な画家である呉漁山は康熙十九年から二十一年（一六八〇～一六八三年）にかけて三巴静学院に行つて道教を学び、その『三巴集・澳中雜咏』第七首に「海上太平無一事，双扉久閉一空亭」の二句があつて、原注では「凡海上事，官紳集議亭中，名議事亭」となつている。乾隆十六年（一七五一年）に書物となつた印光任・張汝霖『澳門紀略』には「議事亭図」があり、この議事亭は一階建ての中国亭園式の建物となつている。一七八四年に元の場所に二階建ての西洋式の議事局が建てられたが、それがいまのマカオ市政庁である。

（訳注1）明朝政府はマカオでのポルトガル人の居住を認めると、マカオを管轄していた香山県は「提調」（外国商船の輸出入に対する税関業務）、「備倭」（倭寇、すなわち海賊の防衛にかかわる責務）、「巡緝」（治安維持のための巡回、犯罪者の逮捕）の三つの行署をおき、海防同知と市舶提挙を派遣してポルトガル人の監督にあたらせた。これらの役人は「澳官」「守澳官」と称された。ただし、重大な事件については両広総督が直接その処理にあつた。このほかに「凡海上事，官紳集議亭中，名議事亭」とされた「議事亭」が設けられていて、そこでは中国官吏がポルトガル官吏（「夷目」）に皇帝の政令を読み上げ、双方で政務やポルトガル商人についての重要な問題の協議が行われた。清朝政府の時代になると、重要な法令については中国語とポルトガル語の二カ国語で刻まれた石碑が議事亭内の入口に立てられている。

（注釈2）本書のポルトガル語はCIDADE DO NOME DE DEOS, NA HAO OUTRA MAIS LEALとなつているが、DEOSはDEUSの誤りである。李鵬翥、前掲書、二百三頁は次のようにいう。一五八一～一六四〇年にスペインがポルトガルを併呑していた六十年間、議事亭には依然としてポルトガル国旗が掲げられていた。ポルトガル国王がマカオ総督に扁額を書いて、議事亭に賞賜するよう命じた。この額はいまなお一階の大堂正面の石段の入口の楣（まぐさ：門の出入口の扉に渡してある横木）に掲げられている。

## （6）カモンイスの洞窟（賈梅士石洞）

クルセンスタイン（Krusenstein）（注釈1）が自分の世界一周の航海記で述べている「中庭や庭園に囲まれた大きな広場のなかに立ち並ぶ多くの精美な建築物」を我々はいまだ発見できていない。幾つかの堅牢な家屋が存在していて、「カモンイスの洞窟」（Camonens 'cave）と呼ばれる岸壁で名の知れている庭園がある（原注1）（注釈2）（訳注1）。『ルジアダス』（Lusiades）（訳注2）の作者はその不朽の作品でこのうえない死後の名声を博するようになったが、彼がその時、マカオで彼という天才の非凡な才能を称賛する者に一人でも出会ったかは信じ難いし、彼を回想して記念碑を捧げようとする者は誰一人いなかったのは疑いないところであろう（訳注3）。ルイス・カモンイス（Luis Camoens）（注釈3）はマカオに滞



在したのは短期間だったというのは、彼は一五六一年に再度、ゴアに戻っていたからである。失意のうちにあった時、彼はマカオで住んでいたといわれる土地で興じた美しい景色によってインスピレーションが湧くと、幾つかの長篇詩 (Cantos) を書き上げたのであろう。

(注釈1) KrusensteinはAdam Johann Krusensternのことを指す。彼はロシア海軍の将校で、一八〇三～一八〇六年にロシアの調査団を率いて太平洋を調査し、世界一周の航海をすると、一八〇五年 (嘉慶十年) に広東に逗留している。清代の文献ではこれを噲啞吨とっている。

(原注1) 補遺四の「哀歌」(An Elegy) を参照されたい。

(注釈2) 李鵬翥、前掲書、三六頁には「カモンイスの洞窟のある庭園はポルトガル語ではJardim de Luis Camoes、すなわち賈梅士花園となるが、ほとんどのマカオ住民はこれを白鴿巢花園と呼んでいる」とある。

(訳注1) カモンイスはポルトガルの詩人である。ジョアン三世の宮廷に仕えていたが、一五四七年に北アフリカのセウタでのムーア人との戦闘で右目を失った。一五五二年にインド、マカオに滞在し、一五六九年にリスボンに帰っており、晩年、極貧ならびに病魔と闘いながら数奇な生涯を閉じている。

(訳注2) カモンイスの叙情詩である。題名の『ウジ・ルジアダス』は、イベリア半島の西端に定住した伝説的な人物の子孫であるルジタニア人、すなわちポルトガル人の意味である。ポルトガル国民の英雄的偉業をたたえた精神性の高い愛国的作品である。インド航路発見とポルトガル航海者バスコ・ダ・ガマの第一回遠征を中心に豊かな創造力を生かしつつ自身の経験に神話などを織り込みながらポルトガル史を浮き彫りにしたものである。ソネット (小韻詩形) が特に優れていて、複雑で繊細な情感を巧みに表現している。

(訳注3) カモンイスがマカオにやって来ていたのかについては歴史学界では定説はないが、文学者の間ではディオゴ・コウト (Diogo Couto) が『八十年』(Decada V III) 第五巻で「(船がマカオからやって来る) 途中、シャムで事故が起こって、多くが逃げ延び、『ウジ・ルジアダス』も無事であった。彼の詩のなかで彼と一緒に乗船していた非常に美しい中国人女性が船が沈んだ際に亡くなり、このため十四行詩を書いて彼女の死を哀悼した」という。詩はこのような書き出しになっている。「私の魂よ。あなたは楽しむことなくこんなにも早く逝ってしまった……」。彼は二部の著作のいずれにおいても彼女をディナメネ (Dinamene) と称していることからこの詩は中国人の恋人に捧げられたものであると考えられるという (呉志良、前掲書、八三～八四頁)。

(注釈3) カモンイスの中国訳名には賈梅士のほかに、迦摩恩斯、卡蒙恩斯、喀摩英、卡蒙因、黔放などがある。

## (7) 防御施設

聖保禄 (サン・パウロ) 山は通常、大砲台 (モンテ) (fortaleza do monte de St.Paolo) (注釈一) と称されていた。スペイン人は (一五九八年に) 広東の官吏の許可を得て平海 (ピニャル) (Pinhal) (原注1) (注釈2) で貿易をしていたが、インドとマカオの当局は自らの利益を考えてマニラ

と中国の直接通商を阻止した。ゴアからの船隊司令官である「カピタン・モール」(Capitao mor) (訳注1) のパウロ・デ・ポルトガル (Dom Paulo de Portugal) がマカオに到着すると、広州の高官のもとに遣わされていたマニラ総督の使節ジョアン・デ・ゼマディオ (Dn Juan de Zemadio) に対して彼の同胞が平海 (ピニャル) で貿易していることへの抗議をする一方、(広東一訳者) 省の官吏に請願書を上呈してスペイン人を港から追い出すか、それとも自分たちにその貿易を認めてくれるかの要請をしたが、この提案はすげなく一蹴された (訳注2)。ドム・パウロ (Dom Paulo) は抗議をしたものの、それ以上の暴挙に出るのを止めたのは、マカオが開放的で防御の施されていない場所だったため、帝国が不法な侵略によって挑発されようものなら間違いなく皇帝の艦隊によって攻撃されていたかもしれないからであろう。

(注釈1) 聖保祿 (サン・パウロ) 山は砲台山とも称され、聖保祿 (サン・パウロ) 教会の付近にある。呉漁三『三巴集・澳注雜咏』第六首は「短氎衣衫革履輕, 砲台上踏新晴」という。大砲台は三巴砲台、中央砲台などとも称される。

(原注一) 平海 (ピニャル) は湾 (ベイ) の外国語の発音に非常に似ていて、ヨーロッパ人は実際には下寮 (ハーレム) 湾と称していた。中国語の平海 (ピン-ハエ) (Ping-hae) は広州の東の遠くない沿岸の南側にある。J.R.Morrison, 'Companion to the Anglo Chinese Calendar for 一八三二' (一八三二年英注対照暦) を参照されたい。

(注釈2) 平海は大亜湾の東側にあり、付近には平海城があって、明清両代には中国の軍隊が駐留していたところで、いまは恵東県に属している。H.B.Morse, 'The Chronicles of the East India Company Trading to China 一六三五~一八三四', vol.二, p.四二七ではそれを平海下寮湾 (Pingai Haerlem Bay) と称し、またvol.三, p.九ではPinhalをPinghaiと記していて、一八〇五年にイギリス王室の軍艦がフィリピンのミンダナオ島でスペインの貨物船を拿捕してマカオに連行する途中、下寮湾 (Haerlem Bay) で損壊したとしている。

(訳注1) ポルトガル政府は収益の多い日本貿易を国家の独占事業とし、国王もしくはインド副王が派遣する船隊の司令官を任命して貿易や植民地を統轄させた。この司令官は「カピタン・モール」と称され、もともとは国家に勲功のあった貴族に与えられる地位であり、船の司令官というだけでなく、滞在地においてはポルトガル大使として、航海と貿易に絶大な権限を有していた。ちなみに、日本人は長崎の出島のオランダ商館長を「甲比丹 (カピタン)」と称したのもこれに由来する (東光博英、前掲書、六〇頁)。

(訳注2) 広東政府はスペイン人との通商を認めず、ポルトガル国王を兼ねたスペイン国王フェリペ二世も一五九五年にポルトガル人の極東での商業利益の保護を重ねて主張してフィリピンとメキシコのスペイン人が中国に入るのを禁止した。そして、マカオへの入港も拒否されると、スペイン船隊は広州から十二リーグ離れた平海で貿易をすると、いまだ城壁をもっていなかったマカオは脅威に感じた。こうしたスペイン

の動きを制して対華貿易を確保する意味からもマカオのポルトガル人は議事会を設立させた。それ以後、スペインが対華貿易から撤退すると、ポルトガル人は日本、中国、マラッカ海峡を挟む東南アジア、そしてマニラとの貿易独占で大いなる利益を手にした。

こうした懸念をしているのをみると、当時、マカオには城壁もなければ、砲台もなかったと推察される。このことは（一六〇七年に）密かにマカオ半島の調査にあたらせるためにパタヴィアから派遣されたメテリィエフ船長（Cap. Matelief）が帰国してオランダ政府に対して作成した報告書から確認される。

この時期からほとんど時を移さずして、中国の高官の同意を得ずに要塞の工事がはじめられた。役人らは心ではこの事業によってイエズス会士がいまや中国の主人にならんとしていると（一六〇六年に）流布していた馬鹿げた噂話を信じるほどにまで不信感を募らせるようになった。一六一二年にマカオの三人の主だった人物がオランダ人はポルトガルとスペインの双方の敵であるから、マカオで城壁と砲台を建築する必要のあることを広州で懸命に説明した。正式な同意は得られなかったが、溢れんばかりの贈物によって官吏らは心が動かされて大砲台（モンテ）から伽思蘭（サン・フランシス）堂近くの海にかけての東北に走る城壁の建設を黙許することにした（一六二二年）（訳注1）。

（訳注1）ポルトガル人は万暦年間にマカオに城壁を設けて一つの都市のようになると、一六二二年にオランダ人の侵略に勝利してからはそれをさらに強化している。

聖俸禄（サン・パウロ）山の砲台は（一六一五年に）かなり大幅に繰り上げられたのは、フランシス・ロペス・カラスコ（Francis Lopes Carasco）がゴアから一六一六年にやって来て軍事長官（カピタオ・ダ・ゲンテ・デ・グエラ）（capitao da gente de guerra）の資格で（ほぼ間違いのないであろう）大砲台（モンテ）に住むことになったからである。（一六二二年以降）オランダ人が再びマカオにやって来る恐れがあったので、マニラから二百人のスペイン兵と数門の大砲が到着すると、ある大佐の指揮下におかれた（訳注1）。

(訳注1) 一六二二年のオランダのマカオへの侵攻については後段で詳述されている。これに敗退したオランダ人は澎湖諸島 (Pescadores Islands) を占拠して中国商人と交易をするが、一六二四年に福建巡撫南居益によって追放されると、台湾を占領して、最初の総督を派遣し、安平港に城砦を建設し、それをゼーランディア城と呼んだ。

軍事長官フランシス・マスカレーニャス (Dm.Francis Mascarenhas) (注釈1) は勤勉かつ行動的であったから、マカオに城壁を造って防御をさらに強化した。入口の上におかれた石に刻まれた年代から判断すると、その工事は一六二六年に完成したようである。当初、マカオ総督や軍事長官たちは大砲台 (モンテ) に住んでいたが、一七四九年のアントニー・ジョセフ・テレルス・デ・メネイス (Anthony Joseph Tellers de Meneyes) (注釈2) が最後であった。

(注釈1) C.R.Boxer 'Fidalgos in the Far East', Hague,一九四八, p.二七三によると、フランシスコ・マスカレーニャス (Dom Francisco Mascarenhas) は一六二三～一六二六年にマカオ総督に就いている。

(注釈2) ポルトガル語ではアントニオ・ジョゼ・テレス・デ・メネゼス (Antonio Jose Teles de Menezes) となる。C.R.Boxer, 'Fidalgos in the Far East', p.二七四を参照されたい。

既述した東望洋 (ギア) 隠修院は (一六三七年に) 城壁によって囲まれていたから小さな守備隊にとっては恰好の場所であった。東望洋砲台 (フォルタレザ・ダ・ギア) (Fortaleza da Guia) は昼間、マカオと広州に向かう船の案内役をしている。船が確認されると、(マカオ一訳者) 総督は合図でそれが近づいて来るのを知らされる。その国籍が書面で確認できると、部隊長は総督のもとに届ける。ポルトガル船が到着すると、鐘が鳴らされる。この砲台と伽思蘭 (サン・フランシス) 砲台および南湾 (ボンパルト) 砲台は一八〇八年にイギリス軍によって占拠されたことがある。上陸海岸——「南湾」(プライア・グランデ) ——は二つの砲台に接している。伽思蘭砲台 (フォルタレザ・デ・サン・フランシスコ) (fortazela de St.Francisco) は伽思欄堂 (サン・フランシス修道院) とは目睫の間であって、一六二二年六月二十四日にレイジェルセン提督 (Admiral Reyerskom) (注釈1) 率いるオランダ艦隊の攻撃を受けると、それに比肩する報復が行われて「彼の数隻の船が沈められ、七十人の兵士が殺された」ということを『ポ



ルトガル領アジア』の著者から我々は聞いている。下級の者が一六三二年に記したところによると、当時、この砲台には一門の大砲しかなかったという。

(注釈1) Kornelis Reyerszoonのことである。ReyerskomはReyerszoonの誤りである。

東望洋（ギア）砲台からの灯光が繰り返し照射されている南湾（プライア・グランデ）の真中にある聖彼得（サン・ペテロ）小砲台（注釈1）とはこれで訣別して、これからははるか以前に最大の礼節をもって順産聖母（バルアルテ・ド・ボンパルト）（Baluarte do Bomparto）と称されていた南湾（ボンパルト）砲台——バルアルテ・デ・ノッサ・セニョーラ・デ・ボンパルト（baluarte de nossa Senhora de Bomparto）——を訪ねることにする。

(注釈1) 道光が許可した（祝准）『香山県志』巻四「澳門東環図」はこれを小砲台といている。

この砲台から城壁は丘陵の西南に上っており、その頂上には西望洋（ペニャ・デ・フランサ）隠修院がある。さらにもう少し西南に行くと、聖地亜哥（サンチャゴ）砲台があり、それは通常、娘媽角（バー）砲台——フォルタエザ・デ・サンチャゴ（fortaleza de Santiago）——と称されている。そのなかには聖者に捧げられている礼拝堂がある。船はマカオ総督の許可がないとこの砲台を通過することができない。中国人のジャンクと小舟はいつでも自在に往来している。

一六二五年に沙梨頭（パタネ）と称される場所に砲台を建設し、幕壁でそれを大砲台（モンテ）とつなぐことが企図されたと私は確信している。中国人はとても激しくこれに反対してこの工事が中止されると、幕壁は内航の入江にまで延びる庭園の堀に変更された。この堀のなかには三巴（サン・アントニー）門——ポルタ・デ・サン・アントニオ（porta de St. Antonio）——があり、大砲台（モンテ）と伽思蘭（サン・フランシス）砲台の間には水坑尾（サン・ラザール）門——ポルタ・デ・サン・ラザロ（porta de St. Lazaro）——があって、二つの門はいずれも曠野に通じている。それぞれには門を夜になると閉め、朝になると開ける数名の市民が見張り

にあたっている。

## 2. 港

### (1) 潭仔（タイパ）（Typa）——外港

ポルトガル人は外国船を島影に潜伏させないよう言い渡されただけでなく、それらを追い払う命令も受けていたが、とくに一七三二年に両広総督がマカオにやって来る船についてそれらの国籍、積載貨物と来航の目的を報告するよう命じた際にマカオ政府に一種の検閲権が与えられたとの見解をわたしはとっている。

主要な港である潭仔（タイパ）港には、他のどの湾や入江よりもっと厳しい「監視」が要求された。いかなる船が潭仔（タイパ）に停泊しているかを報告するためには取り調べが必要であった。船長がマカオに上陸したほうがよいと考えたならば、その紳士に教養があれば何としても最高長官の官邸を訪ねて、話し合っているうちに（マカオ—訳者）総督に満足してもらえることを望み通り伝えるであろう。反対にその船長が礼儀をつくした行動を怠れば、総督は彼を目の前に呼び付けて、どうして船が潭仔（タイパ）に投錨したのかとその理由をたずねるであろう。もし彼らが急ぐのであれば、総督は広州（政府）が了承してくれるという確認を得てから短期か長期かについての同意をする。船に降りかかった不慮の事故の報告を受け、それによって広州に行くのが難しくなったりすると、この思いもよらぬ干渉に無骨で無知なものたちが総督に激しく嘯みついたということがあった。

潭仔（タイパ）の入口では六十四門の大砲を装備した戦艦が碇を下ろすことができるし、マカオの反対側の出口では七、八百トンの荷物を積載した船を安全に係留して北風、南風、東風と西南風を避けることができた。両港間の距離は五マイルという。

## (2) 内港

潭仔（タイパ）の入口から内港に向かって行けば、「マリア・ヌネス」(Maria Nunes) (注釈1) (訳注1) と称される小さな土地と引潮時に現われるマカオ近傍の「檳榔石」(ペドラ・デ・アレカ) (Pedra de Areca) (訳注2) という砂州を通る。娘媽角（バー）砲台の先端を回航して内港に入ると、一方はやや広々とした多彩な砂浜——プラヤス (prayas) ——に接し、もう一方は海岸——リベイラス—— (ribeiras) ——と「拱北（ラパ）」(Lapa) と称される東から北に向かう山に接している。川の深さは貨物を満載した三百～四百トンの船を受け入れるには十分だが、七、八百トンの船が入ろうとすればその前に積荷を軽くしなければならない。水路の深さはさまざまなので、船やジャンクが都市近傍に停泊すると、それらは南、東南と西南の風の吹きざらしにあう。

(注釈1) Nunerは本書の一四三頁ではNunesとなっており、後者のほうが正しい。本書の記述によると、その土地は潭仔（タイパ）から娘媽角（バー）に至るには必ず通過しなければならない、舵尾島にあるマカオと海を隔てた土地で、この島は潭仔（タイパ）と共に十字門の四つの山の一つをなしている。

(訳注1) Maria Nunerは一九九二年版ではMaria Nuneiに改められている。しかし、注釈ではNunesが正しいとされている。

(訳注2) Pedra de Areiaは一九九二年版ではPedra de Arecaに改められている。